

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

新薬と臨床 (1985.03) 34巻3号:521～523.

1% Tolciclateクリームによる足白癬の治療成績

久保 等, 大河原章

1% Tolciclate クリームによる足白癬の治療成績

Clinical Effect of 1% Tolciclate Cream on Tinea Pedis

旭川医科大学 皮膚科教室 (主任: 大河原 章教授)

久 保 等

大河原 章

Hitoshi KUBO and Akira OHKAWARA

Department of Dermatology, Asahikawa Medical College
Asahikawa, Japan (Director: Prof. A. Ohkawara)

I はじめに

Tolciclate は1972年イタリアの Farmitalia Carlo Erba 社で開発された新しい抗真菌剤であり, tolnaftate と類似の構造式を有する。化学名を *o*-(5,6,7,8-tetrahydro-5,8-methano-2-naphthyl)-*N*-methyl-*N*-(*m*-methylphenyl) thiocarbamate といい, 分子式 $C_{20}H_{21}NOS$, 分子量323.45, 水に不溶性の白色または, 淡黄色の結晶性粉末である。tolciclate と tolnaftate の構造式は次の通りである (第1図)。

本剤は不完全菌類に対しては tolnaftate とほぼ同等で clotrimazole より優れているとされている¹⁾。また, その安全性については動物における急性・亜急性毒性試験や催奇形成試験²⁾, 臓器蓄積性試験³⁾で確かめられている。われわれは今回, 藤沢薬品から1% tolciclate クリームの提供をうけ, 旭川医科大学皮膚科において足白癬に使用する機会を得たので, ここに治療成績を報告する。

II 治療方法

1. 対象

昭和58年10月から昭和59年6月までの9カ月間に, 旭川医科大学附属病院皮膚科外来を受診した足白癬患者ならびに同院皮膚科入院患者のうち足白癬に罹患している患者で, KOH法直接鏡検により菌要素を認めたものを対象とした。内訳は26歳から84歳までの男15例, 女5例の計20例で, 足白癬の型別では趾間型12例, 小水疱型6例, 趾間型+小水疱型2例であった。

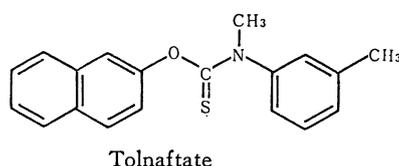
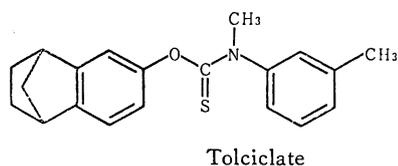
2. 方法

すべての患者に1% tolciclate クリームを1日2~3回患部全体に毎日塗布させ, 使用期間は3週間とした。原則として週1回受診させ観察を行ない, 治療を開始して3週間後に効果判定を行った。

3. 観察項目と効果判定

臨床症状として, 掻痒, 発赤, 疼痛, 丘疹, 水疱・膿疱, 浸軟, びらん, 鱗屑, の8項目について観察を行ない, またその重症度を++:高度, +:中等度, -:なし, 3の段階に分けて判定し

第1図 Tolciclate と Tolnaftate



第1表 治療成績

症例	年齢	性	足白癬の型	投与量 (g)	合併症	臨床 効果	微生物学 的効果	総合効果	有用性	副作用	分離菌種
1	84	M	趾間型	10	悪性黒色腫	不変	不変	無効	有用性なし	なし	(-)
2	42	F	小水疱型	10	慢性蕁麻疹	軽快	"	やや有効	やや有用	"	(-)
3	40	M	趾間型	10	尋常性乾癬	"	消失	有効	有用	"	T.M.
4	38	"	小水疱型	40	なし	"	"	"	"	"	(-)
5	26	"	趾間型	20	S L E	"	不変	やや有効	やや有用	"	T.R.
6	51	"	趾間型+小水疱型	20	なし	"	"	"	"	"	(-)
7	47	"	趾間型	30	"	"	"	"	"	"	T.R.
8	44	"	小水疱型	30	"	"	消失	有効	有用	"	(-)
9	53	"	趾間型	10	"	"	不変	やや有効	やや有用	"	(-)
10	72	F	"	20	帯状疱疹	"	消失	有効	有用	"	T.R.
11	54	M	小水疱型	20	なし	消失	"	著効	きわめて有用	"	"
12	60	F	趾間型+小水疱型	30	"	軽快	"	有効	有用	"	(-)
13	44	"	趾間型	20	"	"	"	"	"	"	T.R.
14	37	M	小水疱型	20	悪性黒色腫	"	不変	やや有効	やや有用	"	"
15	48	"	趾間型	20	脂漏性湿疹	"	消失	有効	有用	"	"
16	66	"	小水疱型	50	なし	"	"	"	"	"	"
17	70	"	趾間型	20	"	"	"	"	"	"	"
18	36	F	"	10	"	"	"	"	"	"	T.M.
19	30	M	"	10	"	"	"	"	"	"	"
20	54	"	"	20	ポーエン病	消失	"	著効	きわめて有用	"	(-)

T. M. : Trichophyton mentagrophytes, T. R. : Trichophyton rubrum, (-) : 培養不成功

た。臨床効果は臨床症状の観察項目の改善度を本剤使用前のそれと比較して、消失、軽快、不変、増悪、の4段階に分けて評価した。

微生物学的効果の判定は治療開始3週間後のKOH法直接鏡検における菌要素の存在の有無により、不変と消失に分けた。

総合効果の判定は臨床効果に微生物学的効果を加えて、

1. 著効：菌が陰性で皮膚症状が完全または大部分消失したもの。
2. 有効：菌が陰性で皮膚症状が軽快したもの。
3. やや有効：菌が陽性で皮膚症状が軽快したもの。
4. 無効：菌が陰性、陽性にかかわらず、

症状が不変のもの。

5. 悪化：菌が陰性、陽性にかかわらず、症状が悪化したもの。

の5段階で判定した。

有用度の判定は総合効果に副作用の発現の有無や本剤の使用感などを加味して、1. きわめて有用、2. 有用、3. やや有用、4. 有用性なしの4段階に分けた。

Ⅲ 治療成績

治療成績の結果は第1表に総括した。臨床効果は、消失2例、軽快17例、不変1例、増悪0例であった(第2表)。微生物学的効果では、菌消失13例(65%)、菌不変(35%)であった。なお副作用は1例にも認められなかった。

第2表 臨床効果

足白癬の型	消失	軽快	不変	増悪	合計
趾間型	1	10	1	0	12
小水疱型	1	5	0	0	6
趾間型+小水疱型	0	2	0	0	2
合計	2	17	1	0	20

有用性の成績は第3表に示すように、「きわめて有用」2例(10%)、「有用」11例(55%)、「やや有用」6例(30%)、「有用性なし」1例(5%)であり、「有用」以上の有用率は65%であった。足白癬の型別による有用性に大きな差違はみられなかった。

また、分離菌種別では *Trichophyton rubrum* 9例, *Trichophyton mentagrophytes* 3例, 培養不成功8例であった。培養に成功した12例についてみると *Trichophyton rubrum* は9例のうち、「きわめて有用」1例, 「有用」5例, 「やや有用」3例であり, *Trichophyton mentagrophytes* は3例共「有用」であった。

IV 考 察

浅在性白癬は発症部位により, 抗真菌外用剤の治療成績が左右される。すなわち, 体部白癬や陰股部白癬は比較的治りやすいが, 小水疱型や趾間型の足白癬の場合, 4週間以上の治療が必要とされているが, その治療効果は不満足に終わることが多い⁴⁾。そこで体部白癬や陰股部白癬のみならず, 足白癬に対しても優れた効果を示す抗真菌外用剤が望まれる。今回使用した1% tolclate クリームは体部白癬や陰股部白癬に対する臨床効果, 微生物学的効果は顕著であるとともに, 足白癬に対しても本剤の優れた有効性が報告されてい

第3表 有用性

足白癬の型	きわめて有用	有用	やや有用	有用性なし	合計
趾間型	1	7	3	1	12
小水疱型	1	3	2	0	6
趾間型+小水疱型	0	1	1	0	2
合計	2	11	6	1	20

る^{5)~8)}。

足白癬患者に対する3週間のわれわれの治療成績でも, 総合効果で有効以上が65%を占め, 菌消失も65%に認められた。また, 副作用は全く認められず, 有用性判定で有用以上が65%を占め, 本剤は体部白癬や陰股部白癬のみならず, 趾間型や小水疱型の足白癬の治療にも試みてよい抗真菌外用剤と考えられた。

V ま と め

新しい抗真菌外用剤の1% tolclate クリームを足白癬患者20例に使用し, 65%の有用性を得た。本剤によると思われる副作用は認められなかった。これらのことから, 本剤は足白癬の治療に試みてよい薬剤と思われる。

文 献

- 1) 西野武志他: CHEMOTHERAPY. 29, 1304, 1981.
- 2) 藤沢薬品工業(株), モンテジソン薬品(株), Tolclate., 1978.
- 3) 野口英世他: 基礎と臨床 15, 2426, 1981.
- 4) 滝沢清宏: 現代皮膚科学大系 7 B, 47, 1982.
- 5) 野崎 昭他: 薬理と治療 8, 1601, 1980.
- 6) 須貝哲郎: 皮膚 22, 467, 1980.
- 7) 渡辺昌平他: 皮膚科紀要 74, 235, 1979.
- 8) 鎌木公夫他: 診療と新薬 17, 2195, 1980.